

て。

② クズバス炭坑―ノボシビルスク（シベリア鉄道）―ナホトカ（約一週間）。

③ 乗船は円滑であった。

④ 船内生活には特に異状はなかった。

⑤ 舞鶴上陸は昭和二十四年八月七日。

11 ① 教職に復帰するための適格審査が遅れたためす

ぐ就職できず、復職後も不利な条件が多かった。

平壤に残してきた家族、妻と三人の子供たちも

一年後無事帰国しており、その後も順調な生活を

続け今日に至っているのは、何より幸いと思つて

いる。

② シベリアでの抑留生活を共にしてきた戦友の中

で、帰国後も文通し、互いに消息を確かめ合つて

きた十人ばかりの人たちの中で、今日、生存者は

私を入れて二人だけになってしまった。時の流れ

とはいえ、まことにさみしいものである。

肉親五人の訃報を聞いた

収容所バルハシ

和歌山県 森 中 定 夫

大正七年一月四日生まれ。櫻川一五〇九番地、私は五男です。郷土の学校卒業後は農業に従事するかたわら青年学校に通い、二十歳のとき、徴兵検査を受け甲種合格。日中戦争の最中、昭和十四年五月一日、現役兵として和歌山中部第二十四部隊第四中隊に入隊し、初年兵教育を終え、南支派遣軍として同年八月、大阪港出航、広東に上陸し、直ちに警備任務につき各方面へ派遣され、従化荘付近の警備に続き各戦闘で砲火を潜り、九死に一生を得て昭和十八年四月凱旋、「黥八等白色桐葉章」、従軍記章を受けた。

その後、昭和二十年四月（当時二十七歳）、和歌山開拓団として満州国滨江省五常県山河屯^{さんかんとん}に入植、新天地の開拓に希望を燃やしたわけであります。

その開拓団に入植する前に切角の崎山道場で訓練を受けました。約半月ほどであつたと思います。

開拓団へ入植したときは結婚していました。渡満するとき、妻は既に妊娠五カ月を過ぎていたと思います。そして八月一日私が応召のあと、満州で出産したのだと思います。開拓団としての期間は三カ月余りでした。入植後一回、畑の植付けをしたのも束の間、戦争は次第に暗雲漂うころとなり、八月一日応召、新京二六〇〇部隊第二中隊に入隊しました。

このときの日本軍の装備は一応小銃、剣などは各人にありましたが、人員は在満の在郷軍人、というよりも少々身障のある者も、とにかく男という男はことごとく召集、編制されたように感じました。

入隊後間もなくソ連軍侵攻の情報を受け、直ちに新京病院を拠点に、いよいよここで討死にかと覚悟を決めて堅いアスファルトを掘り碎き戦車壕を掘る。一週間後、将校官舎に転進し陣地構築中、連隊より連絡あり、中隊長から日本は負けたことを知らされた。その後一時、新京大学舎に軟禁される。その間、食糧の調

達等に苦勞する。間もなく満軍兵舎に監禁、武装解除される。時は八月二十日ころと記憶する。開拓団出身者は団に帰れと一時命令があつたが、すぐ命令は撤回された。

そこで夜中の一時ごろ、四、五人の団友と逃亡を計画し柵を飛び越したが、ソ連の監視兵に見つかりそうになつたので、「まだ命を捨てるのは早い」と引き返し逃亡は断念した。

その翌日、正規の大隊そのままウラジオストク經由で日本に帰るということで新京駅より食糧の積み込みが終わると、列車（有蓋貨車で牛か馬でも輸送するような、しかも上下二段式に小さな窓一つ）は北を指して発車したがなかなかスムーズには進まない。途中、弾薬を積んだ列車の転覆されたものなどもあり、満州地内は無惨の極みであつた。

黒河で三日間くらい駐留の後、ブラゴエシチェンスクに渡り列車は発車した。夜が明けると太陽の出てくる方位がおかしい。よく見ると西を向いて走っているではないか。そこで初めて、ウラジオストク經由で

日本に帰るとは真つ赤な嘘であることがわかり、みんな神妙な面持ちになった。小さな窓も外から鍵をかけられ、食糧給与など必要なとき以外は昼夜の別なく、白樺林を過ぎ、丘陵の草原を西へ西へと走り続けるのと二週間くらいで、着いたところは、バルハシという所で、十月上旬であつたが、もう雪が降っていた。

そこで三カ年間、帰るまで移動なしで働かされたのです。

バルハシに着いてから毎日、私物の検査が繰り返行われた。小刀などは全部引き上げられる。これはあとから考えると笑い話のようだが、次第に検査の行われることがわかってきたので、大事な物は事前に收容所内の雪の中に隠した。ところが、広い收容所の四隅にある監視塔から監視兵がちゃんとお見通しで、あとから全部あばき出された。

作業出発時も帰つて来たときも人員の確認だけで、もううんざりさせられるほどの時間がかかるので、上ばきを片足に紐で縛りつけて作業現場まで行き、監視兵の目を盗んで仕事はしなかったが、こんなに心身共

に苦しいことはなかった。あとで聞いたことですが、こんな場合は真実がどうであらうと、この兵隊は仕事をしたくないから自ら故意に怪我をしたんだ、(サボタージュ)と見なして一向に理解してくれないのだそうです。軍医の言つたことが納得できた。負け戦の悲しみはどこまでもつきまとうと思つた。

生活はもう毎日「腹が減つた、減つた」の連続で、朝食は粟のどろどろしたもの(ロシア語でカーシャ)を飯盒の蓋に一杯程度と魚のスープ。昼は黒パン三百グラムを朝もらつて携行するのだが、作業現場で昼になるころ、冬はコチコチに凍つて食べられなくなるので、ほとんどの者は朝食のとき一度に食べ、昼は水道の水で我慢した。水道の蛇口に口をひつつければ大変、凍りついてしまいますので要領よく……。

野草で食べられるようなものは全然なかった。中に猫を殺して食べた者もいた。夕食はピン三枚(粉を蒸してつくつた薄っ平なもの)と川魚のスープで、夜はなかなか眠れなかった。

たまに倉庫から甜菜を失敬して、甘いもんだから生

で食べ、下痢が止まらなくなり当惑したことを覚えて
いる。

馬鈴薯の運搬、皮むきの使役は、皆喜んで参加した。
帰りにシュールバ（外套）の袖裏に隠し持ち帰り、ペー
チカで蒸して空腹を満たした。黒パンは当初、すえた
ように食べずらかったが、すぐ慣れた。

シラミはなかったが、南京虫には随分悩まされた。
朝起きて見ると敷布が真っ赤に染まっているくらい。

そのため熱湯で駆除したが効果はなかった。空腹と南
京虫で痒くて眠られない上、日中の作業の疲れで、栄
養失調のため倒れる者も多かった。班内の者が死ぬと
衛兵立会いのもとに営門の外に担ぎ出し雪に埋めて、
南無阿弥陀仏と手を合わせて終わりという有様で、こ
こにも敗戦のまじめさが浮かんできてる。特に学校の先
生や会社員などで、体を鍛えていない者は次々と倒れ
た。

ノルマを達成した者には「タロン」と言って食堂券
の配給があった。しかし、我々は一度も恩恵は受けな
かった。極端に作業成績の悪い場合は、小隊長が営倉

に入れられた。こんなとき、営倉の天井から飯盒を吊
り下げ差し入れた。入浴は一週間に一回、桶一杯の
湯である。余程のテクニクが必要。そのとき衣類は
全部滅菌、同時に身体検査も月一回くらい行われた。
ソ連の女医が尻の皮をつまみ、一、二級、三級あるい
は「OK」と分けられ、一、二級は営外作業に、三級
は軽作業、OKは営内作業と分担が決まる。営内作業
も便所の掃除など、体の弱った者にとってはつらいこ
とだったろうと思う。私は幸いに一、二級で通した。
これも入隊前から鍛練していたせいと思える。とに
かくこんな所では死ねんと自らを励ました。

休日は一週間に一回の割であった。休日は主として
洗濯、靴、衣類の修理と休養である。

冬の寒い日、零下五〇度以下は作業は休みである。
作業係将校（ソ連側）は近くの飛行場の気温を聞き、
作業に出るか、休むかを決断する。収容所の気温より
飛行場の方が少し暖かいからである。反対に衛生部将
校（ドクター）は凍傷患者を出さないため収容所の気
温を基準に主張するも、作業係将校にやり切られてし

まう。かくして我々は寒い日も作業の連続である。たまに零下二五度以下ということで休めば次の日曜日は返上、二週間近く連続作業することとなる。

民主教育は全然ありませんでした。反軍闘争もなく、小隊長は最後までそのままでした。

二年目ころ、日本の家族あて葉書を出すことを許されたので半信半疑書きました。それも検閲（朝鮮の人）のため全部カタカナで書くよう指示された。（まるで電報みたい）

それから幾月か経てある日收容所に帰ってみると、みんなの寝台の上に日本から来た葉書が置かれていた。しかし自分のは見当たらなかった。しばらくして小隊長から「森中、あとでちよつとこい」というので小隊長の所に行くと、「君のは余り大勢の家族が亡くなっているようであるのでショックを受けてはと、ここに預かっている」とのこと、受け取った葉書には、

兄二人（共にビルマで戦死）

妻と子（終戦直後満州に於て死亡）

妻の父（郷里に於て病死）

とあった。

その葉書を受け取る数日前の夢に、昭和二十年八月一日満州で応召のとき別れた妻が故郷に帰っているのに出会い、「子供はどうした」と尋ねると、「子供は生まれて一週間で死んだ」と答えた。目が覚めて不吉な思いでいたところへの葉書の知らせであった。

平成六年十一月、五十回忌の法要を勤めたばかりです。

帰還の大分前から、スターリンの命令ということで死亡した者の墓標を建てた。これは日本人が製材所の現場から板を持ち帰り收容所の側に建てたのですが、帰還するころには一面に白いほど、建ち並んでいた。また死亡した者は必ず解剖された。

帰還の四日ほど前から收容所の前に荷車がとまっていたが、実際帰還の命令を聞いたのは帰還当日で、昼前「作業場から東京ダモイするから引き揚げてこい」とのこと、夢ではないかと疑った。そのとき農園に派遣されていたグループ（平素は西瓜やメロンなど豊富に食べられていた）は帰還列車に乗ることができな

かった、後ほど帰ったことと思いますが。

ナホトカに着いて、思想教育のできていない者は伐採收容所に逆戻りさせられたこともあるというので、皆、「赤旗」の歌など歌い、スクラムを組んで氣勢を上げた。民主教育が進んだと判断されるグループから第一分所より第五分所に移り初めて乗船が許された。船の中は大騒動であった。抑留中のアクチブ（活動家）は袋叩きにされ、舞鶴に着いたときは顔が腫れ上がっていた。途中海に投げ込まれたのか、上陸する際、一人足りなかったとのことである。舞鶴に着くと日本の警官が嚴重な監視態勢を敷いていた。便所に行くにも後をつけて来た。

かくして昭和二十三年十一月一日、英彦丸で夢にも忘れなかった故郷に復員する。

しばらく家（兄の家）の農業の手伝いのかたわら、あらゆる仕事に従事、苦勞の末、三年後の昭和二十六年十二月、シゲ子と再婚、家を建て別世帯となり二男の父となる。その間、梅畑の開園など生活基盤の拡充に取り組み現在に至る。

たまたまそれまで住んでいた家が町道の拡幅工事により立ち退きすることになり、平成七年三月、現在地（櫻川一四八一番地の一）に新築移転したところであります。

九十九地区第八ラージル

山口県 中根 弥太郎

中支戦線湖北省荊門より約一カ月半に及ぶ夜間強行軍で満州四平街に転戦、ソ連軍参戦と同時に戦わずして終戦となり、同時に苦難の強制抑留生活が始まった。黒河を渡って、ブラゴエシチェンスクから一カ月に及ぶ貨物列車の旅となる。そして十月一日、カザフ共和国カラガンダ市にある九十九地区第八ラージルに收容される。

以前ドイツ兵が入っていたという收容所は、四方を鉄条網で囲み、四カ所に自動小銃を持ったソ連兵が監視していた。これが四年半にも及ぶ藤部隊千二百人の